

藤森校長を懐く

小林佐源治 「郷土 22 号」より抜粋 昭和 37 年 1 月発行

ぼくがこの高等小学に入ったのは明治 20 年で、名も八名郡立高等小学校といい、生徒は西遠地方から八名郡を中心に、南設楽からそれぞれ藤森校長の名声を慕って集まった者ばかり、中にはデクノ坊もないではなかったが、大方は高い理想を持つ秀才ぞろいであった。

次にその頃の先生は、藤森校長とそのスタッフとして、当時の教育界のエキスパート山中又三郎、巻茂吉、林栄西、鈴木豊三郎、中野喜平、女師としてアンベ先生等で学園さながら勇将猛卒の一大叢林だった。当時、僕の持っていた書物を書くと

- ・荻野山之著 日本歴史（菊判約 300 頁 2 円 50 銭）
- ・カツトル氏著 生理養成論（菊判約 300 頁 2 円 50 銭）
- ・林栄西著 数学（約 100 頁 四六判 30 銭）
- ・ナショナルリーダー（巻 1～3 まで 当時何人にも周知の有名な本）
- ・チャンブレイン英文典（四六判約 100 頁位）
- ・幾何教科書（四六判約 100 頁で多分半面だけだった）
- ・日本外史（和本 10 冊位、漢文古来有名な本）
- ・数学三千題（有名な本、横長のような本）

ちなみに教室における主要教科目の筆記は、生徒各自が毛筆で文語文で書いた。

有名な札幌農学校のクラーク博士は帰米の際学生に、「Boys be Ambitious」と言ったが、藤森校長は氏にまさるとも決して劣るなき大理想をもって、自ら教育の権化となり、これを接するもの咫尺するもの、ことごとくその熱火に燃えた。さらに言いかえると、脈々たる藤森火山脈は、かの富士帯火山脈のごとく炎々と東三河と西遠に火の玉となって燃えたのである。（後略）

（一銚田出身 東京都在住 教育家 元東京高師付小中教官）

小林佐源治は、1880（明治13）年生まれ、八名郡八名村一銚田斎ナダ14番地、小林周平の長男。一銚田尋常小学校を卒業後、1897（明治30）年八名郡立八名高等小学校入学。藤森校長のすすめにより、1898（明治31）年、母校一銚田尋常小学校准訓導となる。翌年愛知県第二師範学校簡易科入学、卒業後、愛知第二師範学校附属小学校訓導として採用された。1908（明治41）年、東京高等師範附属小学校に転任。指導困難とされた複式編成学級や低能児学級の指導法を探求、大正新教育運動期に活躍。生涯担任で通したが多くの著書、論文でその学級経営論が評価された。

八名高等小学校の思い出

浅井誠一

「郷土19号」より抜粋 昭和36年4月発行

私が八名高等小学校に通学したのは、明治40年から43年までの頃であった。尋常小学校4年卒業後、高校1年に進み、2年の頃、尋常小学校修業年限が4年から6年に延長した関係上、高小2年の終了後に再び、高1・高2を繰り返して、結局4カ年の高小教育を終了した。

八名高等小学校の位置は、富岡警察署の裏に当たって道路に沿っていた。校地の奥行きはなかなか広くて、中庭と運動場の西端に、竹藪が境を画していた。

八名高小の当時を省みて、第一に頭に浮かんでくるものは、運動場の西南隅に、天にもとどくかと思われるほどの松の大木があった。樹齢数百年を経た老木で、高さ十丈余（3・4十米余）亭々と空にそびえていた。目通りの直径は7・8尺（2・5米）もあると思われた。ここは生徒の休憩場でもあり、隠れ家でもあり、また論議の場でもあった。その隣に続く竹藪には、椿の花がきれいに咲いて、春の来る日を知らせていた。この老松と藪を背景とした運動場は、相当広いものであったと記憶している。しかし、当時の運動は、まだ現在のような競技は行われず、また、学校祭とか仮装行列とかいうものもなく、みな、体操の実習とか、啞鈴体操とかいうもので、格別印象に残っているものもない。

教室や校舎については、とりたてて言うほどのことはないが、寄宿舎とその古つるべは、忘れられぬものである。これは、その昔、八名郡高等小学校といわれた頃の名残である。当時は、八名郡の全部からこの学校に通学したので、寄宿舎に入って勉強した生徒も相当あったはずである。その当時のことは、漠然として聞き覚えのある程度である。私達は、八名村立高等小学校の時代で、この校舎に入った最後であった・私たちが通学した当時は、この寄宿舎に入寮の者はほとんどなかった。ただ、その裏庭に残った古い車井戸と古つるべは忘れることができない。水質もよく、夏はことに冷水が美味しい味であった。

私たちが在学当時の校長は鈴木鯛次郎先生で、職員は全部で十数人おられたと思う。生徒は高一が60人乃至70人、高二もほぼ同じぐらいで、合わせて120人乃至140人ぐらいであったろうか。時々には、高一全部が大教室に集合して、一斉に授業を受けたことがあった。合同授業は、実にはぎやかな、さかんなものであったと思われるが。生徒は割合に、真面目に勉強したように記憶している。（後略）

日本主義教育を受ける

～漢詩から農耕や軍事教練も～

俳人 富安風生 ふうせい 「新城市誌」より抜粋

村の尋常小学校を終えて、数え年 11 才のとき 2 里ばかり隔った**八名郡高等小学校**に入った。**藤森彦男**という当時郡内に名高い校長兼訓導のもとに、いわば日本主義的な教育を施すことで地方に聞こえた学校だった。その時分の八名校風の特徴は、“教育勸語の宣伝・武士道鼓吹・国民教育・国語研究・実業教育”などの熱心者が羽ぶりがきき、理科研究や唱歌遊戯はまだまだものにならず、**兵式体操と軍歌とはこの時代の花**だった。わが**藤森先生**は、その**代表的な教育者**だったのである。

学課程度が相当高かったことは、たしか1年のうちから英語があり、ナショナル・リーダー第1課“イット・イズ・ア・ドッグ”を習わされたことでもわかる。師範学校出たてのイキのいい先生から、バイオリンというもので初めて音楽を教わった。国語では“成功”だの“長居すべからず”だのと、子供にとって何の興味もない題目の中に、たまたま落合直文の孝女白菊りょうげんの歌というのがあって、甘美な感傷をいたくそそられたことを覚えている。また、**料簡**か、曾根崎心中の道行きりょうげんのくだりが引かれており、受持ちの先生がそこだけ藤森校長に代わってもらった光景なんて、へんなことがいま頭に残っている。校長の教授ぶりも相当奇抜だったようだ。作文の時間に、いきなり自作の詩を書いて示したりした。どんなに作文好きだって、小学生に七言絶句など、むろんチンプンカンプンだった。

地方の実情に応ずる**実業教育**という意味であつたらう。農業などという科目もあり、実習の時間も組まれていた。生徒たちは幼い手に鍬をふるい、肥料をかついで、水みつ桃（その名がどんなに耳新しかったか）を作ったり、桐苗を植えたり、麦まきを率先実行したりした。

兵式体操のために、木銃——といっても、かろうじて鉄砲の外形だけを備えた木具なのだが——が常備されていた。校長の教育ぶりが豊橋の歩兵第18連隊長佐藤大佐に知られ、連隊からときどき将校が来校援助されたという。

何しろ日清戦役で勝利をしいた直後のことだから、校長が**徹底した忠君愛国主義の教育**に熱情を傾けるにも、最も時期が適していたわけだ。子供たちは125世ご歴代の諡（おくりな）を暗記させられたものだ。

放課後の教場のお掃除は、検査の先生が透かしてみても、指でなでてみたりして、少しほこりのあとがあつても不合格で、またやり直しさせられたりした。一事が万事であつた。そういう方針を結晶させたような、あの**自炊寄宿舎制度**には、今から考えるとやっぱり**功罪両面があつた**ようだ。訓練・規律・整頓——全く申し分ないのだけれど、そのかげに集団生活の幼い子供たちの肉体や心をむしばむどのようなものが潜んでいたか——団長その他上級生には、もう大きな青年がいた。青年は何も分からぬ少年をかばいもしたけれども、ロクでもないことも多々教えてくれた。

夜の自習にいねむりをしていると、足音をしのばせて回ってきた校長が、後ろからげんこつのかどで両のコメカミをグリグリとやった。これが“梅干しをくれる”という制裁であつた。帰省には帰省願いを提出せねばならなかつた。ところがその願いが、月末の金銭出納簿と称するこづかい帳の帳じりが、校長の手元の控えと合わない、罰として許可がおりなかつた。勘定の下手な私は、しばしばそのうきめにあつたものだ。

～新城市誌掲載～ （日本産業経済新聞連載「私の履歴書」より）